

医療ルネサンス

No5795

シリーズ
薬

危険な処方

2/4

減薬急ぐと衝動的行為も

「息子が精神科に3年通院し、薬をたくさん飲んで、いるのによくならない」フリージャーナリストの嶋田和子さん(55)は5年前、知人の話をきっかけに精神医療の取材を始めた。間もなく、現実とは思えない惨状にがく然とした。「あまりにも理不尽」。ハンセン病問題の取材の時と同じ思いがこみ上げてきた。学校や家でストレスをため、空想や被害妄想的な話

をした子どもたちが、「統合失調症」の診断で次々と投薬されていた。手の震え、失禁、ひどいだるさ、認知力低下……。副作用が子どもたちを追い込んだ。

抗精神病薬を長く飲むと、誤診と分かっていなくても救われない。減薬を急ぐと、薬で抑えられていた脳の働きが急激に高まり、興奮や暴力、衝動的な行為などが表れる恐れがあるためだ。嶋田さんは減薬に悩

む患者を何人も取材した。小学生の頃、友達を作れず悩んでいたA子さんは、授業中に教室を飛び出した。鏡の中に友達の手がある。などと訴えたりして統合失調症と診断された。薬は1日50錠にもなり、入院を繰り返した。

14歳の時、別の病院で発達障害と診断された。良好な対人関係を築きにくい特徴が、落ち着かない行動や幻視につながったのだ。医師と相談しながら家で少しずつ薬を減らしたが、その過程で興奮したり、暴力をふるうことが増えた。外で暴れて警察が出勤することもあり、両親はA子さんを精神科病院に入院させた。

それから約3年。18歳になったA子さんは入院を続けている。薬は以前よりも減ったが断薬には至らない。更に減らすと衝動性が高まり、病院がこらえきれ

ず薬の量を戻すためだ。父親の反対で、家に戻って減薬を再開することもできない。

嶋田さんは「彼女は病院に閉じ込められ、対人関係を学ぶ機会も奪われている。医療被害者を救済しない社会はおかしい」と話す。静岡県のB子さん(31)は、誤診によって13歳から約10年間、不適切な投薬を受けた。減薬中、ナイフで自分の足を突き刺したり、頭を壁に打ち付けたり、裸で外に飛び出したりした。家族は「必ず良くなる」と信じて耐え、近隣住民の理解を得るためB子さんの病状を説明して回った。

断薬できたのは24歳の時。以後も記憶力低下などに悩まされたが、今はすっかり回復し、昨年からは一般企業で元気に働いている。

母親は「都会では奇声を上げただけで通報され、減薬を断念する例もある。国や地方自治体は減薬を専門的に行える施設を早急に整備してほしい」と訴える。



取材内容を振り返る嶋田和子さん。昨年は「ルポ 精神医療につなげる子どもたち」(彩流社)を出版した